

〔書評〕

山本欣司著 『樋口一葉 豊饒なる世界へ』

山口直孝

『樋口一葉 豊饒なる世界へ』という題名に、夭折の文学者に対する賞賛を予想する読者は、期待を大きく裏切られることになる。本書ではまず、「樋口一葉」という固有名への通路があえて断たれている。一葉の名が登場しない論も少なくなく、触れられたとしても形式的な言及に留まる。「豊饒なる世界へ」という言葉も、本論中には見つけることができない。書名は、中身の充たされていない空虚な器を表すかのようなのである。一見アイロニーのように受け取れる名づけは、筆者山本欣司の研究の構えに由来するものであろう。

作品を論ずる場合によくある、「○○」は××年××月、雑誌『○○』に発表された」という書き出しを、山本は使わない。対象とされているのは、「奇蹟の十四箇月間」と称される一葉の後期作品七編であるが、書誌的事項は見事に省略されている。確認的記述は削ぎ取られ、まず提示されるのは、作品の核心を衝く問いである。平易な言葉遣いによる、無駄を省いた論述は、作品と直接向き合おうとする姿勢が要請した文体と見ることがができる。

読解作業への集中は、従来の一葉研究が作り上げた共通認識に亀裂を走らせるため、自覚的に選ばれた態度であった。

書き手の自称としては、「私」が選ばれ、「私なりに空白のドラマを読むならば」、「（二四ページ）、「私には賛成できない。」（二九ページ）、「しかし私のとらえ方は、それらとは大きく異なる。」（一三六ページ）と、積極的に用いられている。論者の顕在化は、定説化した作品理解に異議申し立てを行うため、意図的に選ばれたものであろう。とはいえ、山本は恣意的な読みによる自己主張をもうろんでいるわけではない。「前半のシークエンスのはたす真の役割」（三六ページ）や「十三夜」に込められた真の訴え」（一九五ページ）といった物言いからは、あくまで語り手（ないしは作者）の意図に迫り、正しい解釈を施そうとする志向がうかがえる。

「あとがき」によれば、山本が樋口一葉の作品と取り組むきっかけは、学部時代の前田愛「『大つごもり』の構造」との出会いであったらしい。「小説のコンテクストを掘りおこすこと」の難

しさと喜びとを前田の論文から学んだ山本は、それをわがものとする努力を続けた。「第一章 「正直は我身の守り」——「大つごもり」を読む」は、「前田愛氏の傑作論文との格闘を果たすことができ」たと回顧されている一編であり、「ノイズに満ちた、テクストに内在するさまざまな要素をすべてカバーし、説明できるような形で構造を把握する」(二三ページ) 考察の恰好の例である。

前田愛の「大つごもり」論は、登場人物の間を流通していく金銭に着目して、物語が「質・情誼の表現としての金銭」と「量・営利の表現としての金銭」との対立・葛藤の構図を持つことを説いた考察であった。構造主義の知見を援用した前田論は、一葉研究の画期となったものであるが、山本は前田論を撰取しながら、さらなる前進を試みる。分析に際してまず心がけられたのは、主人公の感情や思考を精確に測量することであった。それは、前田において距離を置いて観察され、論評されていた想像上の人物の自律性を回復する作業と言い換えることができる。

御新造の気まぐれに翻弄された末に店の金二円を着服したお峯は、ことが露見しようとした時、主人に「正直は我身の守り、逃げもせず隠られもせず、欲かしらねど盗みましたと白状はしましよ」と覚悟した。盗みを働いたにもかかわらず、自己の行為を「正直」と正当化しようとする意識に注目した山本は、お峰の変化がこれまで見落とされてきたことを疑問視し、彼女の心性に近づくために近世からの民衆思想の系譜を参照する。大きな歴史的文脈を読解に導入することは、小説の細部への目配りがともすれ

ば近視眼的になる弊害を警戒してのものであろう。安丸良夫「日本の近代化と民衆思想」に依拠して山本は、民衆にとつて「正直」という徳目が受動的な行動規範ではなく、他者と関わるため自発的に引き受けられた実践原理であると把握する。忠勤の甲斐なく御新造に裏切られ、口惜しさを味わったお峯は、理不尽さに逆らう決意を固めた。石之助の行動によって彼女の意志は表明される機会を持たなかったものの、内面の変貌が見落とされてはならないと、山本は力説する。近世から引き継がれた価値観を内面化して受苦的な状況を耐え忍ぶ一方で、意地という芯を保持している存在——、山本がお峯に見出した姿は、他の主人公の形象にも通じるものである。

お峯と同様の精神を備えた女性としてお関をとらえたのが、「第九章 「十三夜」論の前提」・第十章 お関の「今宵」／齋藤家の「今宵」——「十三夜」を読む」の二つの「十三夜」論である。前者では、玉の輿に乗ったお関が夫原田勇から受けた虐待が理不尽の極みであったことがたどられる。不和の要因をお関にも求めていた先行研究に対して、山本は疑義を呈し、彼女の訴えを事実と見なす。非対称な関係を無視した読みを斥ける姿勢は本書で一貫しており、倫理性と同時に説得力を感じさせる。我慢の限界に達したお関は、「名のみ立派の原田勇に離縁されたからとて夢さら残りをしいとは思ひませぬ」という心境に至る。しかし、彼女の離婚の決意は確たるものではなかった。後者の論では、お関の感情の揺れが追跡される。十三夜の日、月見を行う血縁の絆

の懐かしさに誘われ、お関は実家に戻る。父親から翻意を促されて、彼女が簡単に受け入れたのは、行動が衝動的なためであった。帰途、幼馴染の録之助と偶然再会したお関は、自分の結婚以来身を持ち崩した彼の現状に暗澹としながら、原田の家に帰っていく。一方、お関に翻意を促した実家も、一家の安泰が彼女の犠牲の上に築かれている以上、気持ちが悪くはない。十三夜の日起こった波乱、偶然の再会は、現状を何一つ変えず、重い霧囲気のまま、作品は幕を閉じることになる。救いのない結構を持つ短篇を、山本は「ドラマ」と呼ぶ。「ドラマ」は、本書の鍵となる語の一つであり、劇的な状況を指すと同時に声にならない登場人物の憤懣や悲哀を含蓄するものとして使われている。

「第七章 過去を想起すること——「にこりえ」を読む」にも、「ドラマ」の語は登場するが、注視されているのはお力の華やいだ姿でも、結末のカタストロフでもない。「第八章 お力の「思ふ事」——「にこりえ」試論」と併せて追究されているのは、お力の弱者としての側面である。容姿が美しく、人気があるとしても、お力が酌婦の一人にすぎないことを、山本は冷静に見据える。自由がなく、しかも相手の境遇を狂わせる恐れのある仕事に携わる彼女の絶望は深い。将来を展望できないお力は、いきおい家族にまつわる記憶を想起することになる。「仕方がない矢張り私も丸木橋をば渡らずはなるまい、」(五)に始まる、よく知られた父・祖父をめぐる述懐は、山本によれば、「今こ」の閉塞観がもたらしたものにほかならない。わが身を拘束され、後ろ

向きになった意識が血縁者とのつながりに向かうことで、お力とお関とは類似する。「にこりえ」の難解さのゆえんを、過去から現在への因果形成を当然視する研究者の読みの偏向に求め、認識の転換を求めた見解は、魅力的な挑発である。

近代の社会再編の過程で取り残された貧困層に関心を向けた作者にとつて、現実を無視した通俗的な解決は封じ手であった。作品は、徐々に主人公の無念そのものに、また、やるせない思いが共有されえない状況に焦点が当てられるようになっていく。「第六章 「冷やか」なまなざし——「ゆく雲」を読む」・「第十一章 出会わない言葉の別れ——「わかれ道」を読む」の二編が扱っているのは、理解する相手を持たない女性の孤独である。「ゆく雲」・「わかれ道」は、いずれも男女の別れを描いているが、山本は「ドラマ」の実質を問うため、二人の関係性そのものの見直しを図る。「ゆく雲」については、上京して私学に学ぶ青年桂次の浮薄さが、同時代資料との引き合わせによって炙り出される。上京青年と下宿屋の娘との恋という話型を採用しながら、桂次とお縫との仲は深まらない。桂次の誘いかけにこたえず、お縫の心は閉ざされる一方である。気難しい父と親切心のない継母とによって抑圧的に育てられ、「身を無いものにして」生きる悲憤な気持ちを固めた彼女は、生半可な言葉では動かされない。「わかれ道」の場合、お京と吉三とが親しく交流しているのは、作品理解の大前提であった。しかし、本文を虚心に読んだ時に見えてくるのは、擬似家族的な結びつきを求めているのは吉三だけであり、お京は

吉三に無關心なことである。山本は、互いをとらえそこねた二人が分かりあえぬまま別れていく物語として、『わかれ道』を再定位する。関係の失調あるいは不全のモチーフを明確にしたことは、本書の功績の一つになろう。

「奇蹟の十四箇月間」に書き継がれていった『たけくらべ』は、他作品と連絡しながら、複数の課題を引き受けた小説である。

『たけくらべ』には四つの試論が用意され、特に周到に議論が進められている。「第二章」「たけくらべ」の方法」では、まず表町と横町との対立という、自明視されてきた枠組が解体される。正太郎は、資本の力を借りて地縁の秩序を乱そうとする者であり、であるからこそ、長吉は敵対心を強めていった。子供たちの世界の見方が修正されるだけでも驚きであるが、指摘はさらに続く。

長吉が祭りの日に筆屋を襲撃する挿話の真の役割は、信如の名を美登利に印象づけることであつた、と山本は述べる。長吉の啖呵で引き合いに出されることによって、信如は美登利に意識されるようになる。信如が何の感情も抱いていないにもかかわらず、美登利は好意を募らせ、相手の無反応に勝手に傷ついていく。錯誤の連鎖こそが作品の実相であり、語り手は読み手を誤つた方向に導く危険性を自覚しつつ両義的に語つているという、大胆な見解が本章では提出されている。「第五章」「たけくらべ」の美登利」は、美登利の信如への思いの移り変わりを、時系列に即して整理し、再度吟味したものである。

「第三章 売られる娘の物語——「たけくらべ」試論」・「第四

章「たけくらべ」と「成熟」と」では、性体験を過度に重視した解釈が修正される。美登利の変貌は、初潮や水揚げによるものではなく、親の意志によって身売りされることを実感的に知つたことであつた。山本の拠つて立つ「人身売買説」は、女性が正に商品として取り引きされていた歴史状況を再認識させる。一葉については、フェミニズムの研究成果が目覚しいが、山本の仕事は、女性差別の実情を直視する意識において、それらにまっすぐ連なるものであろう。長吉の成長の契機として「若者組」への加入を想定する仮説は、いわゆる「筆おろし」を通過儀礼ととらえる見方よりも、大音寺前という地縁共同体のありように即して蓋然性を持つように思われる。美登利や長吉が、セクシュアリテイに規定される受身の存在ではなく、自らをよく知り、周囲の期待に応えるために意識的にふるまえる人間であるという分析に共感を覚えた。

奥行きのある内面を備えた主体が登場しているにもかかわらず、『たけくらべ』には出会いがなく、物語は振れていく。近代化は、地域社会の解体、労働者の流動化、階級再編などの現象を引き起こした。社会の構造変化は大規模なものであり、個人の営みだけでは状況に抗することはできない。一葉作品が分かりにくさを伴うようになるのは、時代の動向を敏感に察知し、物語の定型を崩すことをいとわずに応接しようとしているからであらう。

「第十二章 物語ることの悪意——「われから」を読む」は、『われから』を「噂をめぐるドラマ」と評価する。他人の秘密に好奇

の目を向け、あれこれ取り沙汰する世間を再演するかのようによ、本作では語り手が誤解を誘発する語りを行っている、と山本は言う。主人公お町が夫から離縁を宣告されるのは、仲働きの告げ口によると推測されるが、下宿の学生と姦通の事実があったかどうかは定かではない。語り手は、事実を明らかにしないまま、風説に従う身ぶりを示すのである。「われから」は「企てに満ちた小説」であり、物語内容と物語言説とのずれに気づかないと、読み誤る可能性が高い。信頼できない語り手の誕生は、あるいは「たけくらべ」で摸索されていた語りの技法の深化ととらえてよいかもしれない。

本書は、独立した作品論から成っているが、刺激的な読みが随所に見られ、章を超えた関連づけを行うよう、読む者を誘惑してやまない。樋口一葉を論じたことのない人間が書評を引き受け、たどたどしく内容を紹介したり、私的な理解を記したりしてきたのも、山本論に魅了され、多くの教示を得たからであった。紹介が不正確であったり、私意に過ぎたりするところがあるとすれば、不明を詫げるしかない。

門外漢である評者であるが、注文がないわけではない。個別のものとしては、第六章で「上京青年と下宿の娘の恋」を描いた小説例は、より「ゆく雲」発表時に近いものである必要があることや、第七章の過去想起をめぐって一般論に止まっている部分をより当時の文脈にすり合わせていかなければいけないこと、などが挙げられる。機会があれば、これらの弱点を補うことが望まれる。

一葉に触れることに禁欲的なことが本書の特長であることは既に触れたが、そのために論述が窮屈さを強いられている部分があることは指摘しておいてよいかもしれない。均整の取れた短編を創造できていた作り手が、あえて作品に「ノイズ」を加え、不透明性を強めていく実験に挑むようになるのは、作品との対話的關係を生きていたからであろう。山本の論考の連なりは、創作主体が自作の反作用によって鍛え挙げられ成長していく過程を示唆している。現代と対峙するために変異を繰り返す一葉像は、やはりその姿を最初に見出した者によって詳述されるのがふさわしい。序論や結論が省かれたことは、潔い選択とはいいえ、一方で惜しまれる措置であった。作品間の連関を説き明かす新考の執筆は、直近の課題と言わねばならない。

「豊饒なる世界」は、疎外される者が鬱屈した思いを抱えながら、孤立を余儀なくされる非情な現実を凝縮して形象化した小宇宙を指す。抑圧状況の容赦ない言語化がすぐれた達成たりうる事情は、さらに解き明かされなければならない。「豊饒なる世界へ」踏み込む準備作業がつかなく果たされた現在、次に求められるのは、「豊饒なる世界そのもの」により踏み込んだ探究である。山本欣司の第二期の仕事がどのような一葉像を提示するのか、刮目して待ちたい。

(和泉書院、二〇〇九年十月二十四日、二六四ページ、定価七〇〇円＋税)

(やまぐち・ただよし 二松学舎大学教員)